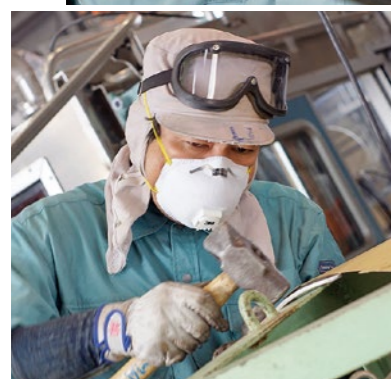


▶阿部社長は「乗組員の命を預かる」ということは家庭を守る「父親」としてその責任の重さを語る。



特集

伝え継ぐ水都の技

造船所 株式会社 聖人堀鐵工所

世界三大漁場の1つとされる金華山沖を目前に控え、国内有数の水揚げ高・量を誇ってきた石巻。水産を基幹産業とし漁業や加工業、造船業など、海と向き合う暮らしは変わらず続いている。『水都』。いつしかそう呼ばれ始めたこのまちで培われてきた熟練の技。「魅力の再発見」が随所で叫ばれている。決して華やかとは言えない裏方として、水都を支える職人たちの技術はきょうも脈々と受け継がれている。

海外巻き網船で国内8割

旧北上川が太平洋に抜ける河口部。日和大橋のアーチが兩岸をつなぐ。かつて右岸側に流れていた聖人堀という堀がある。「なぜ聖人堀という名前になったのか、由来はわからないんだ」。そう語るのは、門脇町で造船所を営む株式会社聖人堀鐵工所の阿部幸社長(66)。「1隻の注文が来たら1隻を納品するだけ」。淡々とした語り口からは自信がのぞく。

旧北上川河口部、網地島ラインの発着場すぐ近くに佇む工場。ここで造られる船は海外巻き網漁業船の搭載船の国内シェア8割を占める。阿部社長が勤め始めたのは23歳の頃。「親父が当時の専務と麻雀仲間です」「入らないか」と言われたんだ。月日が流れた今、社長として思う。「もっと多くのお客様に届けたい」。

食卓にマグロやカツオ、サバなどが並ぶのは同社のおかげ。巻き網漁は大きな本船と、魚群を探すワーキングボートや網で魚を捕り込むスキフボートといった小さな搭載船で、一度に大量の魚を捕獲する漁法。全国の搭載船のほとんどがここで造られている。

搭載船は本船が海中に投入した網を巻く際に、その端部を押さえるなど網の中で作業を行う。漁場は島一つない外洋。大しけの中でも作業を行うため、常に転覆の危険が付きまとう。現在、同社が造船した8隻を

運用する地元の八興漁業株式会社
の阿部達男社長(66)は「石巻だけで
なく、全国の巻き網漁業界にとってな
くてはならない存在。安全性と作業
性は突出していて他とは比べ物にな
らない」と絶賛する。

転機重ねて

聖人堀鐵工所は昭和20年、財団法人宮城県物資更生協会石巻支部聖人堀鐵工所として創業を開始。現在の社名で会社組織となったのは昭和24年。当時は一般機械器具の修理製作などを手掛けた。船にはエンジンや板金修理などで携わった。

昭和36年に転機が訪れる。顧客の依頼で本船と岸との間を往復して積み降ろしを行う小さな手漕ぎ伝馬船を初造船。それまで積み重ねた技

術と経験が詰め込まれた。56年には東北で初めてアルミ製の搭載船も製造し、巻き網漁の発展に貢献した。以来、数々の船を造り続けこれまで手掛けた船は538隻。今では日本全国の船会社が信頼を寄せるトップシェアの造船所となった。

東日本大震災では従業員2名が犠牲となった。工場も津波が1階部分を突き抜け、周囲から広がってきた火災も重なり、大きな被害を受けた。残った従業員が総出で修繕した工場内には今も黒く煤けた跡が残る。

「もうダメかな」。当時の阿部社長の思いを掻き消したのは全国の顧客からの「応援してるぞ」「待ってるぞ」という熱い激励だった。「我々が船を造らなければ、漁に出られない人が



本木 卓見 / 20歳
宮城県水産高校出身 / 入社2年目 / 最年少

たオーダーメイド」とし、現場の要望を改良に結び付けてきた。

「ここには見本となる多くの先輩がいる。若いうちは見て一緒に作業して覚えるしかない」と周囲を見渡し、「全員で一人前の職人を育てていくんです」と語る。若手には「真面目に働いて、将来的に伸びる」と太鼓判を押した上で、「港に沢山の船が入ってくるこの景色の素晴らしさを感じてほしい」と海を見つめた。

妥協ない技術で

鉄鋼業から移ってきた人もいる。神田操さん(44)は7年前に入社。幼少から機械いじりが好きだった。「技術に妥協はない。皆真面目に取り組み、若い人も感心するほどよくやっついて」と話す。夏は暑くて、冬は寒いのが大変だといいい、「健康で長く頑張っ



神田 操 / 44歳
石巻工業高校出身 / 入社7年目 / 鉄鋼業経験

て、自分たちが作っている船が石巻の役に立てばうれしい」と熱い思いを抱く。

船は誇り

定年を迎えてなお、技術は磨かれ続ける。阿部民生さん(65)は中学を卒業後、聖人堀鐵工所筋、今年で50年目を迎えた。これまで、同社で造った538隻の内、最初の1隻を除く、537隻に携わった。「技術は見て盗め」という社風は当時から変わらな。ただの鉄の板から、骨組みを作り、一つの船が形になっていくのを見る人が喜んでくれるのもいいよね」とにっこりと笑う。

家ではインターネット動画サイトで巻き網漁船の搭載船を検索することもあるといい、「ほとんどすべて

たくさん出てくる」と強い気持ちが高ぶってきた。その年の5月中旬にはボートの修繕を開始。設計図などはすべて流されたが、「従業員の技術と経験がうちの財産だから」と笑い飛ばす。そして6月下旬、震災後第一号となる搭載船を出荷した。

大きなやりがい

現在、従業員は20〜68歳まで19名。20代が6名と最も多い。本木卓見さん(20)は地元、宮城県水産高校を卒業後、昨年春に入社した。「学んだことを生かすため、とにかく船に携わりたかった」と語る。新入社員として朝番に出社。電気を付け、作業道具を使える状態にする。部品や道具の名前を覚えるところから始め、先輩たちの仕事を見て、自分のものとしてきた。



萬谷 和幸 / 36歳
河南高校(現:石巻北)出身 / 入社16年目 / 親分

今年で2年目。任された作業を報告すると「できるようになったな」と褒められることもある。「一人でできるようになると成長を実感できて、大きなやりがいを感じる」と白い歯をこぼす。石巻で生まれ育った本木さん。震災で傷を負った故郷への思いがある。「震災があったからこそ、海を大切に自分たちの船で巻き網漁業を活性化できれば」。頼もしい一言だ。

全員で育てる一人の職人

「昔から図工とかが好きだね」と話すのは、工場の大黒柱である親分、こと萬谷和幸さん(36)。ものづくりをする仕事にと高校卒業後、別の造船所で働いた後、聖人堀鐵工所に場所を移した。同社の強みについて、「型にはまらず、顧客の意見を聞いて



阿部 民生 / 65歳
石巻市立渡波中学校出身 / 入社50年目 / 元親分

の船にかかわってきた。船は俺の誇りだよ」と胸を張る。培ってきた技術について「伝え継いで、改善できるところは改善してほしい。あとは本人のやる気次第」と若手に聞こえるようにエールを送った。

水の都の餅屋として

今日も聖人堀鐵工所では金属を打つハンマーや、研磨するグラインダーの甲高い音が響き渡り、溶接機から発せられる白や青の光が防護マスクや製造途中の船体に反射し、工場内を照らす。

同社がある場所は震災復旧に伴う堤防整備によって移転を余儀なくされている。河口部の4造船所共同で石巻市へ要望書を提出したが、いまだに具体的な支援や場所については

示されていない。阿部社長は経営者として「現実的な問題なんだ。従業員が安心して働ける環境を早く整えたい」と課題を吐露する。

「餅は餅屋」は同社のスローガン。かつて大手造船メーカーの社員に言われた言葉だそう。そこでは大型船のノウハウはあるものの、搭載船となると聖人堀鐵工所には及ばず、今では同社に造船を依頼する。

石巻の「餅」とはなんだろうか。それは、水の都の名にふさわしい熟練の技術と伝統かも知れない。海を離れる人や声があつても、聖人堀鐵工所の若者の目は輝き、親分や先輩、元親分は今も腕を磨き続ける。胸に刻まれる水の都の誇り。海と暮らすまちの技はこうして伝え継がれている。

聖人堀鐵工所の工場が、悠々と流れる旧北上川に寄り添うように佇んでいる。



従業員一人一人の手で船が形を成していく。日本の巻き網漁はここから始まる



伝え継ぐ水の都の技